

たかしょう

高倉小が目指す特別支援教育

かつて、障がいのある子どもたちは、聾学校・盲学校・養護学校などの別の学校へ通うのが当たり前という時代がありました。しかし今、世界の教育現場はインクルーシブ教育(みんなが同じ教室で学ぶ)という新しい考え方に基づき、大きな転換期を迎えています。日本の障がい児教育は、明治以降、長らく排除と分離の歴史を歩んできました。1950年代には「障がい」のある子を普通学級から排除することで、普通学級の教師の指導を容易にし、教育効果を上げるという文部省の指導があり、特殊教育が推進されました。これは、障がいを個人の「欠陥」と捉え、本人が社会に適應できるよう努力すべきだとする古い考え方です。しかし、日本ではまだこの考え方が差別とともに根強く残っています。「障がい児といっしょに学ぶと授業の質が下がり、うちの子の学力低下が心配です。」という声はまだ聞かれます。他人と競争して1点でも多く点数を取り、受験競争に勝ち抜くことで幸せが得られると考える「成果主義」の考え方です。

学生時代の「成績」は個人主義的な評価です。A 君は80点、B 君は60点だとすると、A 君が高く評価されます。しかし、社会人になると評価基準が変わります。例えば、A 君は、社会人になっても職場の仲間には無関心で仲間が困っていても知らん顔で自分の成果だけを追求し80点を取り続けます。一方、B 君は相変わらず60点ですが、隣の席の30点しか取れない C 君に仕事を教えて60点を取らせました。社会人としての B 君の評価は、自分の60点に C 君を育てた30点が加算され90点となり、80点の A 君よりも高い評価になります。これが社会人の評価基準です。他にも、いつも50点の D 君だけど、D 君がいるとチームの雰囲気が良く

なり、まわりの10人のパフォーマンスが15点ずつ上がりました！というような人もいでしょう。さて一緒に働きたいのは誰ですか？チームのメンバーを選する立場になれば誰を採用すればプロジェクトが成功しそうですか？そして、楽しく仕事ができそうですか？

小学校で障がいのある子をできるだけ分けず、誰もが同じ教室で過ごし、互いの存在を前提に学び合い教え合うことを実践すれば100年後の社会は誰にとっても住みやすい社会になるでしょう。学校は、B 君のような「共生力」を育む場となります。一人の力だけでは動かない壁も、隣の人を支え、力を合わせる術を学ぶことで、社会全体をより良い方向へと動かすことができると思います。

ある学級で担任が休みだったので私が「学び合い」の授業をしました。みんなと同じ課題をするのが難しいなかよし学級在籍の A ちゃんが教室にいました。私は、A ちゃんに対して周りの子らがどんな関わり方をするのかを見たかったので、知らないふりをして「30分でクラス全員が〇〇の課題を全部終わらせること」を求めました。開始5分くらいで、A ちゃんのことを気になった子が A ちゃんの横に行き何かに話していました。そして私のところに来てこう言いました。「いつも A ちゃんは、なかよし学級でみんなより簡単な問題をしてるから、校長先生が出した課題は A ちゃんには難しいと思います。A ちゃんだけ、いつものなかよしの課題をするのはだめですか？」私は、この1年間でこの時がいちばん嬉しかったかもしれません。「よく言いに来たね。さっそく A ちゃんに合う課題を持ってきてもらおうね。」と返してなかよし学級の先生に A ちゃんの自学課題を用意してもらいました。A ちゃんは、その子と時々話をして、教えてもらいながら笑顔でその課題を全部やり切りました。この学級は、「誰一人取り残さない」が自然にできているすばらしいクラスだと思いました。この子も A ちゃんも、世界をインクルーシブな社会に変える力を持っていると思いました。子どもたちは未来の「希望」であることを確信した昨年の出来事でした。